

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu 蒼穹

2019.9 Vol.136



教育学部第1期生の初等教育実習始まる (詳しくはP.07をご覧ください)

特集

地域の課題から国際的分野まで 多様に展開される教員の研究テーマ

研究成果を授業に反映するとともに地域社会に還元

- P.02
- 日本スポーツとジェンダー学会第18回大会を開催しました P.05
- 第44回全国経営学部長会議を開催 P.06
- オーストラリア・ニューカッスル短期海外研修旅行2019 P.08
- 地域連携活動 P.10・11
- 研究室で開発した商品がG20晩さん会のメニューに採用 P.14
- 「2019年度松本大学教育実践改善賞」論文募集 P.15 ほか

地域の課題から国際的分野まで 多様に展開される教員の研究テーマ 研究成果を授業に反映するとともに地域社会に還元

大学教員が各々の専門分野の研究を行うことには、研究により得られた最新の知識や情報を授業に還元すると同時に、広く社会に普及・発信し、我が国の学術・教育・文化の復興・発展に寄与するという、重要な使命があります。本学では日々の教育に必要な研究費を各教員に配分するとともに、研究や教育に必要な活動を支援する目的で様々な学内助成を行なっています。また、種々の外部資金を獲得して研究を遂行している教員もあり、大学院、各学部、学科、松商短期大学部ではこれらの研究により得られた最新の成果を授業に生かした教育を行っています。

本特集では、中堅・若手の教員に焦点を当て、これらの資金を活用して行われている研究を紹介します。今回は紙面の都合上一部の研究紹介となりましたが、他の研究についても別の機会に紹介していきたいと思ひます。

(研究推進委員長・人間健康学部長 木藤 伸夫)

広告産業の空間構造 — 経済地理学からのアプローチ

総合経営学科 専任講師 古川 智史

私の専門分野は、人文地理学、その中でも経済地理学です。経済地理学の対象やアプローチ方法は多様ですが、私は「広告産業の空間構造はどのようになっているのか」をテーマに掲げて研究に取り組んできました。具体的には、広告関連企業の立地はどうなっているのか、企業間の取引関係はどのような地理的範囲に形成されているのか、それらは広告産業を取り巻く環境変化の中でどのように変化してきたのか、などです。

研究内容としては、まず統計資料をもとに広告業の地域的分布や各地域の広告業の特性をグラフや地図という形で可視化し

分析する、ということが挙げられます。広告業はいわゆる「東京一極集中」という状況ですが、その内部をみると都心部の特定のエリアが広告業に「特化」しています(右図参照)。加えて、文献などの様々な資料から大手広告会社の立地展開を明らかにしたり、フィールドワークとして広告産業の実態調査を行ったりしてきました。特に、アンケートやヒアリング調査を通じて得られる貴重な知見は、私の研究を進める上で非常に重要なものとなっています。

現在は、地方圏における広告産業の変容に関心を持っています。メディアの変化などを背景に、地方圏の広告産業ではどのよう

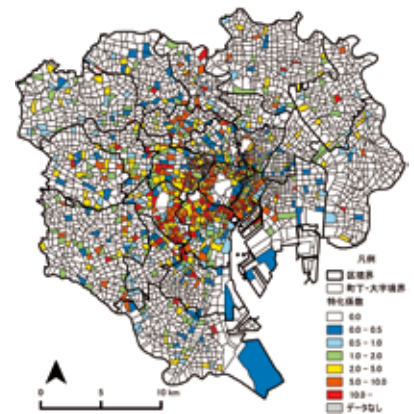


図 東京都区部における小地域別広告業特化係数 (2014年)

注:境界未定地域を除く。
資料:「平成26年経済センサス基礎調査」により作成。

な変化が起きているのか、それは日本全体の中でどのように位置付けられるのか、といった点を経済地理学のアプローチを通じて解き明かしていきたいと考えています。

自然豊かな信州で 環境教育の意義を求めて

観光ホスピタリティ学科 専任講師 田開 寛太郎

「環境教育」といえば、たんに環境問題解決の手段としてリサイクル、節電や省エネなどを学校や地域で教えることだと思われがちですが、そうではありません。さまざまな角度から人と自然とのつながりを意識するためのアプローチであり、学習者の人間的成長をうながす主体形成の教育として、重要な可能性を持っています。

1. バラエティに富んだ湿地や水をめぐる人間の関わり方

私の博士論文のテーマは、「湿地のある地域づくり」に向けた湿地教育(湿地の教育力)の探求です。「じめっ」として近付きがたいイメージがありますが、実はそうでは

なくて、身近な暮らしや生業と密接に関わる貴重な存在であることへの理解が欠かせません。現在は湿地生態系の頂点に君臨するコウノトリや、湿地帯としての水田を利用したフナ養殖をキーワードに、国内外の研究調査を続けています。

2. 自然環境との共存による持続可能な社会の実現

信州遠山郷の自然資源に注目し、専門家や地元の方の案内を受けながら観察と記録を行っています。ここでは持続可能な社



信州遠山郷の活動(2018年「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」にて)

会を実現するための、観光の力を利用した地域課題解決の様々な方法を見ることができます。ジオ(地球)・エコ(自然)と人間との関わりを全身で感じ、信州遠山郷が奥深い自然との共存が求められる地域であることを踏まえて、その今後の価値と利活用について学生と共に議論しています。

3. 原発事故後の福島を考える

環境教育的視点から、子どもたちが少しでも安心して福島県内の野外で「学び・遊ぶ」ために必要なことを考えるとともに、県内の自然学校や森のようちえんの関係者と共に自然体験活動を進めるための学習

(形態)のあり方を模索しています。原発事故から私たちが何を学び、どのように伝えていくのか、絶えず考えていくことが大切です。



水田フナの調査(長野県水産試験場佐久支場にて)

アレルギー患者の生活の質(QOL)向上を目指して

食物アレルギー患者のQOL向上を目標に①災害時の食物アレルギー患者支援としてのパッククッキングの活用、②花粉-食物アレルギー症候群(PFAS)のアレルゲン解析と食事指導への応用、について研究を行っています。

東日本大震災で被災した食物アレルギー児は避難所で食べられる物が得られず、保護者が子どもの食べられるものを探して避難所を何カ所も回ったり、誤食でアレルギーを発症したりと苦労されたことが調査報告から明らかになっています。パッククッキングはポリ袋に材料を入れ湯せんする調理法であり、ポリ袋毎に内容物を変えられるため、食物アレルギー患者の個別対応が容易に行えます。しかし、微量の混入でも発症する患者がいることから、アレ

健康栄養学科 専任講師 沖嶋 直子

ルゲンがポリ袋間を移行しないことが必須です。分析の結果、湯せんによるアレルゲンのパック間移行の可能性が極めて低いことが証明されました。現在は、患者の多い幼児食や離乳食のレシピ考案を行っています。

PFASは、花粉アレルゲンと構造の類似した果物や野菜に対して症状を示し、シラカ

ンバ、ハンノキ花粉症患者におけるバラ科果物(リンゴ、モモ等)へのアレルギーが多く見られます。原因食材の除去以外に治療法はないことから、これらの果物類を好む患者のQOLを損ないます。そこで長野県産リンゴ25品種を試料とし、PFASの主要アレルゲンであるMal d 1の定量を行い、低発現リンゴ品種を複数種類見出しました。今後は臨床医の協力を得て、経口負荷試験により「患者が無症状で食べられるリンゴ品種」を探査し、PFAS患者の食事指導へ活用したいと考えています。



経口負荷試験のイメージ

審判員のためのストレス対処モデルの構築

健康科学研究科・スポーツ健康学科 准教授 齊藤 茂

どのような競技スポーツにも競技規則、いわゆるルールというものがあり、選手たちがそれを順守することによりスポーツは“競技”として成立しています。そして、選手とともにそれを守り実際に判定を下す役割を担う人が、本研究の対象者である審判員です。現代の競技スポーツにおいて、彼らは必要不可欠な存在と言えるでしょう。さらに彼らは、「演出家」(前田, 1986)としての役割まで期待されており、「観衆が興奮させられるようなゲームにするのもつまらないゲームにするのも審判員次第」とまで言われています。

しかし審判員も人間であるため、判定における誤り、いわゆる誤審を「ゼロにすることは不可能」(浅見, 1988)です!そしてその一つの誤審が、試合結果を直接左右してしまうこともあります。私自身、競技者、また指導者

として30年以上にわたってスポーツ競技の現場に携ってきましたが、彼らの判定による泣き・笑いを度々経験してきました。そして最近では、松本を拠点とする緑のチームのサポーターの方々は、坊主頭の選手の得点がオフサイドの判定(明らかな誤審)により取り消され、「あの得点が認められていれば…」と泣いたのではないのでしょうか。こうした問題を解決するための一方案として情報テクノロジーを用いた判定が導入されていますが、これまた審判員にとっては、新たなプレッシャーになりうるとも考えられます。このように審判員を取り巻く現代の状況は、まさに「審判受難の時代」と言われています。ここまでの、審判員にかかるプレッシャーやストレスの大きさが皆様にも分かっていただけたのではないのでしょうか。



本研究では、こうした審判員を取り巻く状況を鑑み、彼らにかかるプレッシャーやストレスの実態を明らかにすることを目的とした面接調査を行っています。これまでのスポーツ心理学領域における研究対象は、専ら“競技者”や“指導者”であり、“審判員”を対象とした学術的な研究は非常に少ないと言えます。さらに本研究は、「ストレスやプレッシャーに対する対処法を学びたい」(上川, 2008)という現場の審判員の方々の要請にも応え得る、実践的かつ独自性が高い研究になると考えています。

発達上の課題・困難を有する非行少年の実態と発達支援に関する調査研究

学校教育学科 専任講師 内藤 千尋

「発達上の課題・困難を有する子どもも必ず成長・発達していく」ということを、特に少年院に在院する青少年から学んでいます。4年前から私が取り組んでいる研究は、少年院に在院し発達障害等の発達上の課題・困難を有する非行少年に対する面接法調査です。面接を通して、特別支援教育・特別ニーズ教育の観点から彼らに対する発達支援のあり方を検討しています(本研究は法務省矯正局少年矯正課との共同研究:研究代表は東京学芸大学高橋智教授)。

発達障害等の発達困難が、非行に直接的に繋がるということではありません。しかし、少年院では入院前の家庭・学校・地域における貧困・ネグレクト・被虐待・暴力・いじめ等のために多様な発達上の課

題・困難を抱え、特別な教育的ニーズを有している少年が少なくありません。家庭裁判所の審判により送致・入院し、「非行少年の社会不適応の原因の除去と健全な育成を目的」として矯正教育が行われる少年院では、24時間体制のもと生活指導・職業指導・教科指導・体育指導・特別活動指導のきめ細かい教育が行われています。

発達上の課題・困難を有する非行少年も、安心・安定・生活リズムの整った生活環境(衣食住や健康保健の保障)と、法務教官に個別に「しっかりと向き合ってもらい、話を聴いてもらう」という支援により大きく発達します。少年の不安・緊張・ストレスの軽減や、喪失していた「自己と他者への信頼」の回復等が、彼らが本来有している

発達の可能性を引き出したと考えています。今後も、当事者の多様な声やニーズから、発達上の課題・困難を有する子ども・若者への伴走的発達支援のあり方を究明していきます。

なお、筆者らの研究は、NHK「ハートネットTV:シリーズ罪を犯した発達障害者の“再出発”第1夜少年院の現場から」にて放映されるとともに、これまで読売新聞、毎日新聞、日本教育新聞、教育新聞等で報道されました。また発達科学研究教育奨励賞受賞、未来教育研究所研究助成奨励賞受賞や博報財団・マツダ財団・松下幸之助記念財団・明治安田こころの健康財団等の研究助成による支援を受けています。記して感謝申し上げます。

親支援プログラムの実践 —地域における参加者間の助け合い・育ち合い

松商短期大学部 准教授 中山 文子

私の専門分野は臨床心理学、具体的にはカウンセリングの実践です。相談所や病院(精神科・小児科)の経験、犯罪者更生への支援、そして私自身の子育ての経験から、発達段階早期における支援の必要性を強く実感し、現在は子育て支援の分野に力を入れています。2017年には虐待通告件数は過去最多となりました。子育てに地域社会や専門家が積極的に関わり家庭の負担を軽減し、子どもの健全な発達

を支援していかなければならないと考えています。

具体的には行政と連携して約6年前から、「育児不安の軽減」「仲間作りのサポート」を目標としたプログラムを実施してきました。塩尻市において、計7回の少人数向けの連続プログラムと、計3回の大人数向けの連続プログラムを市の担当者と協力しながら計画、実施しました。両プログラムとも親同



親子と学生の学び合い

士が安心して話し合える時間を作り、お互いの気持ちを共有してもらいました。結果、非常に良い成果が見られ、小グループ講座の方は今も良好な仲間関係が続いています。また、学生も一部関わったことで、助け合い育ち合いのプロジェクトになりました。

現在は松本市で赤十字乳児院と協力して、「親の育ちのサポート」「親子の愛着形成」を目標に新プログラムを実施しています。専門的な内容をロールプレイングで分かりやすく体験し、参加者主体の話し合いも取り入れて和やかな雰囲気です。市の支援で不足している部分を補えるような実践を通して、地域における子育て支援システムを構築していきたいと思っています。

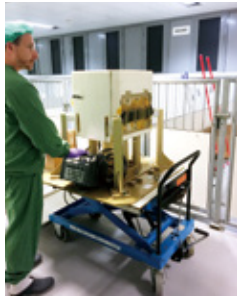


親同士の学び合い

過重力環境がマウスの各種組織に及ぼす影響 イタリア・ジェノバ大学との共同研究

健康科学研究科・スポーツ健康学科 准教授 河野史倫

7月16日～18日に、アムステルダム(オランダ)のアムステルダム自由大学にてマウスの筋組織サンプリングを行いました。現在共同研究を行っているイタリア・ジェノバ大学の研究グループは、Mouse Drawer System (MDS)というマウスを遠



Mouse Drawer System (MDS)

隔操作で長期間飼育できる装置を開発し、2009年に宇宙での3ヵ月間飼育を実現しました。この装置を用いて、現在は、遠心力によって

作られた過重力環境がマウスの各種組織に及ぼす影響を共同研究しています。今回は、15日間3-G環境に曝露する実験を実施しました。イタリア、オランダ、日本、アメリカ、ベルギーから多くの研究グループが集まり、それぞれが専門とする組織をサンプリングしました。重力下で生きる我々は、常に重力による負荷を受け、筋・骨・循環機能を発達させます。重力の無い宇宙では負荷がないため身体機能が極端に衰えますが、この解決策のひとつとして“宇宙で重力を作り出す”という構想があります。今回の一連の共同研究は、どれくらいの重力量・期間が必要なのかを解明するための研究の一部です。地上においても、過重力負荷は



身体機能高め、衰えにくい身体をつくることができると考えられています。本共同研究で我々は大腿筋の解析を担当し、遺伝子の構造変化について調べます。多くの異なる専門領域からの研究者が集まり同一個体の様々な組織を解析することで、生理機能の適応変化を総合的に解釈しようとしています。次回は2020年3月に30日間の3-G環境曝露実験が行われます。

大学院生の研究が 長野県科研費に採択

健康科学研究科の1年生内山菜南さんがこの度、長野県科学振興会からの助成金を交付されることになりました。

題目:「グルタミン酸貯蔵システムを利用した骨格筋維持機構の理解」

最近の学術的活動から

日本スポーツとジェンダー学会第18回大会を開催しました

健康科学研究科・スポーツ健康学科 准教授 新井喜代加

6月29日、30日に本学にて日本スポーツとジェンダー学会第18回大会が開催されました。過去17回の学会大会はいずれも大都市で開催されており、地方である松本市での開催は学会にとって初めての試みでした。今大会には、学会会員(二日間で延べ110人参加)のみならず、会場校である本学の教職員・学生、さらには長野県民も集いました。

大会では、2018年からの3年間の統一テーマを「スポーツとジェンダーを展望するー東京2020大会後を見据えて」と設定し、持続可能で包括的な社会におけるスポーツのあり方について模索しています。テーマ

設定1年目となる昨年は「社会的格差とスポーツ」を大会テーマにして、これまでほとんど論じられてこなかった「社会的格差がスポーツにもたらす影響」について議論されました。2年目にあたる今回は、大会テーマに「インターセクショナルな視点からスポーツとダイバーシティを問う」を掲げました。

一日目の基調講演では、清水晶子氏(東京大学)に「多様性の可視化がもたらす意義と課題ーフィア・ポリティクス、商品化、そしてインターセクショナルリティー」についてお話いただきました。

続くシンポジウムでは、「多様性を包摂するためのスポーツの課題」というテーマのも



グループ課題に取り組み本学教職員と学生

と、まず、田中洋美氏(明治大学)に「身体の構築と表象ー多様な身体・スポーツのあり方を考えるためにー」という題目でお話いただきました。続いて、後藤太輔氏(朝日新聞社)による「スポーツの高度化と排除ーメディアや選手の役割と課題ー」について、來田享子氏(中京大学)による「オリンピックと多様性ーオリンピックは人々の属性に対する規範の持続的な再考の場になり得るかー」についての発表。最後に、清水氏よりコメントをいただき、それぞれの演者にフロアーから寄せられた質問に回答する時間も設けました。

この他、会員から企画を公募した分科会発表(3題)や一般発表(6題)も行われました。分科会発表のなかには参加型企画があり、熱心にグループ課題に取り組む本学教職員や学生の姿が印象的でした。地方の活気ある雰囲気なかで、アカデミックな議論が展開され、大会が盛会のうちに終了しましたことを大変嬉しく思います。



シンポジウムのようす

第44回全国経営学部長会議を開催

副学長・総合経営学部長 教授 増尾 均

去る8月30日に松本丸の内ホテルにて、本学は幹事校として第44回全国経営学部長会議を開催致しました。今年の全体のテーマは、「経営の知を活かした人づくり」となっており、第1部で「大学教育アントレプレナーシップ」について基調講演と対談を行い、第2部は「地域づくり=人づくり」をテーマに松本大学の取り組みを報告いたしました。第2部では、まず



県内の中小企業の人材育成について講演を行い、その後本学の人材育成方針について報

告を致しました。本学の取り組みについては、自校でも実施したいとのことから、情報交換会の際に詳細な質問を多数いただく事ができました。第1部・2部ともに閉会後に回収したアンケートを見ますと、先生方の興味を引く構成となっていたと思います。

このように反響も大きく、また好評価をいただくことができ、今後の励みとなりました。

最後になりますが、開催に向けてご尽力いただいた多くの教職員並びに学生の方々に心より感謝申し上げます。

健康栄養学科特別公開講演会

～「栄養の指導」について考える～

健康科学研究科・健康栄養学科 教授 廣田 直子

前期試験最終日の8月2日5時限目に2019年度第1回健康栄養学科特別講演会を開催しました。この特別講演会は、健康栄養学科3年生向けに、臨床の場で「栄養の指導」を担う専門職としての考え方について学ぶ機会として設定しましたが、当日は健康栄養学科の1・2年生、4年生の参加者もあり、皆、熱心に聴講していました。



加藤先生の講演の様子

講師は、信州大学医学部附属病院で管理栄養士として患者様の栄養指導に従事した

経験があり、現在は管理栄養士養成大学の教員である二人の先生でした。一人は城西大学薬学部医療栄養学科助教の加藤勇太先生で、「医療現場の栄養指導～Evidence-basedとNarrative-based～」というテーマで講義していただきました。

臨床におけるEvidence-based“科学的根拠に基づく医療”とNarrative-based“物語と対話に基づく医療”の特徴の説明に加え、「人の人生を変える“最高の栄養相談”」について、学生が自ら考えることを重視しつつ講義を進めてくださいました。カウンセリングについては通常の講義で学習していますが、多くの学生が加藤先生のお話に共感し、動画に登場した患者様に、自分だったらどのように対応するか、また“最高の栄養相談”に必要な総合力とは何かを考えたようです。



本学大学院修士が後輩に向けて講演

もう一人は、同じ大学・学科で助手として勤務している井上雄介先生です。前述したように、お二人は信州大学医学部附属病院で同時期に管理栄養士として働いておられ、井上先生はその後、松本大学大学院に入学して修士課程を修了された先輩です。井上先生には、「医療現場での課題から研究へ、そして、学生成成へ」というテーマでの講義をお願いしていました。後輩でもある学生たちに、自分の夢に向けて楽しみながら学びを深める重要性を伝えてくださいました。改めて、今後、自分はどのように生きていきたいのかを考えた学生も多かったようです。

この特別講演が多くの学生の成長につながってくれることを願っています。

あそびクニック2019

～もっと遊ぼう! いっぱい笑おう!～

学校教育学科 教授 小林 敏枝

8月4日、本学第2体育館を会場として、障害のある・なしにかかわらず、子どもの発達と特性に応じた色々な遊びが体験できるイベントを開催しました。教育学部小林ゼミが主催し、信州大学医学部新生児学・療育学講座、また地域の放課後児童デイサービス、社会福祉協議会の方々と連携して実施しました。



ドラムセッションでリズムを感じ楽しむ参加者

一人一人の子どもたちに適した遊びの提供・遊び方の工夫をし、みんなが楽しく遊べる「遊びの広場」の開催を目的として、企画から準備・運営まですべて学生の手により進めました。

イベントのオープニングは、教育学部ドラムサークルによる「ウエルカムコンサート」で始まり子どもの興味を引き出し、子どもた



全員で記念撮影

ちが全員参加してのドラムセッションでは、みんなで心地よいリズムを感じ楽しみ、リズムを合わせる達成感に笑顔が広がりました。

「夏祭りコーナー」では、綿あめ・輪投げ・お菓子つりの屋台が出て、子どもたちの行列ができました。「遊びの国」では、感覚遊びやサーキット、ボールプールなど各々が好きな遊びを通じて、思い切り体を動かし色々な人と関わる遊びを楽しみました。最後は、参加者全員の手形で作った「花火」と参加者の身長と同じ長さのテープで作った「ひまわり畑」を鑑賞しました。

教師を目指す学生にとっては、子どもの発達特性を考慮した遊びを考えたり、地域の方々との交流や障害のある子どもと関わる事ができ、貴重な学びの機会となりました。

教育学部第1期生の 初等教育実習始まる

教育学部 教職センター 専門員 高山 雪

地域の「ひとづくり」を担う教員を養成したいとスタートした本学教育学部は、本年度開設3年目を迎え、5月13日を皮切りに第1期生の初等教育実習が始まりました。すでに実習を終えた学生たちは、目を輝かせ驚くほど多弁になって実習で得た感動や学びを話してくれます。また、実習後には多くの学生が是非教員になりたいと熱く話してくれます。学生の人生を変えてしまうかもしれない魅力が教育実習にはあり、その陰には、お世話になった学校現場の細やかで温かいご配慮があることが、学生の言葉や実習記録簿から感じられます。このように育てていただいた学生たちが確かな教員となれるよう、より一層の指導をして参ります。



教育実習を終えた学生たちの声をご紹介します。

太田 美帆 (学校教育学科3年・長野県上田東高等学校出身)

実習に行ったのは、上田市立塩尻小学校の4年生のクラスです。2年次の学校インターンシップでお世話になった学校だったので、生徒との関係性がある程度できていた上での実習でしたが、立場の違う今回は、前回に比べて責任をより感じました。現場では授業を進める中で、どこまで子どもの気持ちを尊重できるか、その境目を見つけるのが難しかったです。特別支援の教員免許も目指しているので、来年も教育実習に行きます。今回見つかった課題にどう取り組むか意識しつつ、頑張りたいです。

皆川 七海 (学校教育学科3年・新潟県立小千谷高等学校出身)

地元新潟県の東小千谷小学校3年生のクラスに入りました。応用力に自信がなかったので準備はとにかく念入りに行き、指導案を作る時にも「こういう答えが返ってきたら…」と色んなケースを想定して実習に挑みました。しかし行ってみると意外なことに、困ったときには子どもたちのほうが「こうしたほうがわかりやすい」など教えてくれ、色んな意味で学ぶことの多い3週間でした。子どもたちの「先生になって戻ってきてね」「教えてもらって算数が好きになったよ」の言葉がとてうれしく、これからの励みになると思います。

宮島 哲正 (学校教育学科3年・長野県篠ノ井高等学校出身)

担当したのは2年生32人のクラスです。全部で8回の授業をしましたが、大学の模擬授業で使っていた言葉やあいまいな言い回しは通用しないし、見学した先生の授業のように進まない等できないことだらけで、もっと教壇に立つための力をつけたいと痛感しました。学校ボランティアや学校インターンシップの期間より長く、また違った立場で子ども達と関わったことで子どもの個性や関係性が見えてきて、3週間、子どもたちとじっくりと関わり先生方にも指導してもらいながら試行錯誤したことで、教師になりたいという目標が固まりました。

吉田 有志 (学校教育学科3年・新潟県立小出高等学校出身)

南魚沼市立北辰小学校の6年生25人のクラスを担当させていただきました。指導案を作成する際には、担当の先生と一緒に遅くまで残って考えてくださったり、親身に指導して下さったことに感謝しています。6年生ということもあり、当初は子どもたちも大人しくどう関わればいいのか心配でしたが、休み時間に一緒に遊ぶなど、関わることで距離が縮まり、それによって授業も進めやすくなるという相乗効果を実感しました。朝のHRから終日担任させてもらった日があるのですが、時間の管理やもめごとの対応など、学生である今の立場とは反対の、先生という立場で必要な力などの課題が見つかりました。

学びの風景 地域とともに 地域をフィールドにした実践的な学びをご紹介します。

ゼミOB生が活躍するサン工業(株)に訪問調査 総合経営学科 教授 兼村 智也

私のゼミでは地域企業の経営にかかる疑問を経営者の方からお話を聞くことで、その解明につなげる取り組みを行っています。今回は伊那市のサン工業株式会社を訪問させていただきました。同社はメッキ加工を主とする製造業でありながら、従業員の定着率がよく、平均年齢は33歳、女性比率も35%という高水準にあります。こうしたことが、なぜ可能になったのかを川上社長らにお

尋ねました(左下写真)。お話によれば、頻繁に行われる社内研修会などを通じて従業員の間に良好な人間関係ができていて、これが社内に明るい雰囲気をもたらし、働くモチベーションにつながっていることや、また若い人もチャレンジできる環境にあることがインターンに参加する学生たちに伝わり、新卒者の入社につながっているとのことでした。

訪問当日は、私のゼミOBで2016年同社に入社した北原裕貴さんにも参席いただきました。彼からも「会社にいる時間は自宅にいるより長い。仕事だけでなく、研修会などを通じて親しくなった人と会えるのが会社に来る喜び」と前記を裏付ける実感のこもったコメントをいただきました。また工場の案



兼村ゼミOBから社会人としての生の声を聞く



川上社長のお話熱心に耳を傾ける学生たち

内役も彼に務めてもらいました(写真上)。数年前は参加学生側だった彼が、今度は自分が案内するほどになった成長をみるにつけ嬉しく思うとともに、ゼミ生にも自分達の将来をイメージでき、大いに刺激になったようでした。こうした活動を通じて学生が地域企業を知り、卒業後その発展の一助となり、また我々に教育の機会を提供してくれる。この「循環」は「地域の大学」ならでは教育のあり方でもあり、それを生み出すことが我々の役割と再認識する機会にもなりました。ご多忙にもかかわらず、こうした機会を提供していただいたサン工業株式会社の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

着実な成果が現われる 英語力向上に向けた本学の取り組み

教務課 係長 上條 直哉

現代におけるグローバル化社会の進展は地域社会にも及んでいます。地域貢献を理念に掲げる本学では、英語運用能力を持った学生を地域社会に供給することが求められると考え、英語教育に一層の力を注いでいます。

TOEIC対策講座では8月22日に英語トレーニングスクールICC代表取締役として

TOEIC受験参考書を多数執筆されている千田潤一氏を講師に迎え、スコアアップに向けた実践的な学習方法を中心とした特別授業とTOEIC S&Wテストを実施しました。

左下に示した本学での英語教育に向けた様々なフォローの結果、英語外部試験の受験者数の増加や留学者数の増加、英語外部試験結果におけるスコアアップとい



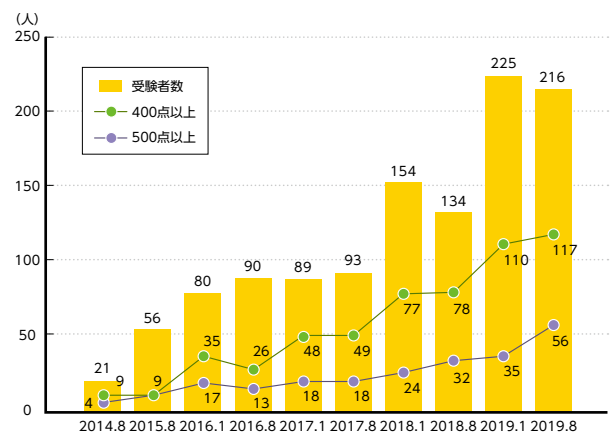
千田氏を講師に迎えたTOEIC対策講座

た成果が着実に表れています(右下グラフ参照)。今後も引き続き、学生の語学力向上に向けた取り組みを通して地域社会を取り巻く国際化に向けた貢献をしていきたいと考えます。

本学での英語教育に向けた正課内・外のフォロー

- 全クラスがネイティブ教員による英会話授業の実施
- TOEICやTOEFL、GTECなどの英語外部試験を科目の到達目標にしたカリキュラムで、スコアアップを支援
- 入学から卒業まで無料でe-learningを提供
- 目標点数別でクラス分けをしたTOEIC対策講座を開設。
- 今年度からは新たに完成した「グローバル・コミュニケーション・ラウンジ」で週3回English Caféを開設
- 留学プログラムの充実
今年度本学で予定している留学プログラムはイギリス、オーストラリア、カナダ、台湾、韓国への7プログラム。教育学部ではこの他にマルタ共和国、アメリカ・ハワイへの独自プログラムも予定。

校内TOEIC IPテストの受験者数・高得点者数の推移



オーストラリア・ニューカッスル 短期海外研修旅行2019

学校教育学科 専任講師 藤原 隆史

オーストラリア・ニューカッスル短期海外研修旅行が、湘北短期大学との共催で2004年に始まってから今年で15年目を迎えました。湘北短期大学がプログラムを始めたのが1993年とのことで、もう四半世紀以上の歴史があるプログラムです。今年度は8月12日から25日の二週間という短い研修期間でしたが、本学から参加した10名にとって大変有意義であり、尚かつ挑戦と感動に満ちた貴重な経験でした。期間中、平日の午前中に行われたAll

Englishの授業では、その大変さにも戸惑いながらも徐々に英語に慣れ、最後には相手の考えに対して自分の意見を述べ、大勢の前でスピーチができるまでに成長した学生たちの姿がありました。また、ニューカッスルの文化や自然を体験するエクスカーションでは、ドルフィンウォッチングやサンドボーディング、さらにはアボリジニの文化施設の視察などを通して、人と自然の多様性を肌で感じる事ができました。最終



日には、ホストファミリーや大学の関係者も参加し、卒業式とフェアウェルパーティが行われ、感動のうちに全プログラムを終了しました。

川脇 志帆(学校教育学科1年)

海外に行くのは初めてでしたが、自分の英語力がどこまで通用するのか確認したい気持ちと、人生経験としての海外経験を積みたい気持ちがありました。教育学部ではマルタ共和国への独自の留学プログラムがあり、英語で子どもたちに授業を行う体験ができます。それに向けてもまずは経験を積んで自信をつけておきたいという目標もありました。ホストファミリーにも恵まれ、日本では得難い経験の連続の2週間で、勇気を出して挑戦してみてもよかったと思います。滞在中、頭の中で翻訳しなくても英語がすぐに口から出るようになり会話を楽しむことができました。聞き取りが苦手である等課題も見つかったので、これからますます英語の勉強にも力を入れていきたいです。



ホストファミリー先にはベトナムからの留学生も

学生一人ひとりの多様な目的に応じて 基礎的な学力をバックアップ 基礎教育センター

全学教務委員長・松商短期大学部 経営情報学科長 浜崎 央

基礎教育センターでは日々、学生のための学びの場を提供し、基礎学力の維持・向上を図っています。その一環として、約10年前より始業前の時間を利用した「朝の学習講座」を開講してきました。平日朝の9時から30分間という短い時間ですが、英語・数学・社会・国語の4科目を日替わりで、今年度も前期の開講日から14週に渡り実施してきました。ここ数年では、開講日にセンターの座席数以上の参加希望者があった



5号館を会場にした朝の学習講座

ため、本年度の4月には一般教室を会場にして開講するほど利用する学生も増えてきています。苦手な科目を少しでも克服し就職試験を突破するための対策としてセンターを利用する学生が多いですが、朝の30分という時間を有効に利用して、少しずつでも目標に向けて頑張っていると思っています。

そのような取り組みを行っている中、昨年度、センターを利用してきた学生には、長野県警察官採用試験や市役所などの公務員試験を突破した学生が複数います。今年度も、公務員はもちろんですが、中学校教諭希望の学生や自治体の管理栄養士を目指す学生なども頻りに訪れており、難関の目標に向かって努力を重ねている姿



が見られています。

また、就職試験対策以外にも、例えば、TOEICの高得点を目指して勉強を重ね、800点台を取得した学生や180点以上アップした学生、数学の勉強の仕方を学びたい学生、留学前に英語でのプレゼンテーションを学びに来る学生など、センターを訪れる学生の目的は様々です。さらに、同じ目的でも学生によって高校までに学んできた科目や内容も違っているため、専門員は、その目的やレベルに合わせた方法で指導を重ねており、それにより確実に成果をあげている学生が多くいます。これからも夢に向かって頑張っている学生を助けるセンターとして、きめ細やかな対応をしていきます。

資格取得のフォローや就職活動のために毎日利用 目に見えて力がつくことを実感しています

須藤 駿(観光ホスピタリティ学科3年)



基礎教育センターに通い始めたきっかけは、1年生の夏にセンターの先生に声をかけてもらって数学検定2級の受験をしたことでした。主に資格取得のためのフォロー学習として利用してきましたが、先生方の手作りの問題を解くと添削してもらえて自分の弱点がわかりますし、各教科の先生方がほぼ毎日在席しているので、疑問に思ったことはすぐに質問して解決でき、勉強するのに最高の環境だと思います。毎日少しずつでも時間を見つけて通うようにしていて、今は就職活動のために一般教養を中心に勉強しています。先日受験したSPI模試では朝の学習講座に通った結果、全国上位に食い込むことができ、就活に向けての大きな自信になりました。自分の実力が試験の結果という形で目に見えてどんどんつくことで自信がつきモチベーションも上がります。

「作文苦手です」…本当に? 基礎教育センター 専門員 国語担当 丸山 強

「今週末受ける会社には採用試験に小論文の課題があります。テーマは『学生時代力を注いだこと』で原稿用紙3枚も書かなければいけません。作文が苦手です。何とかありませんか?」例年、就職活動最盛期には慌てた学生が基礎教育センターに飛び込んできます。焦っている学生と手始めに課題論文のテーマについて話してみると、ゼミやアウトキャンパス、学生会やアルバイトで実に価値のある活動をして、それを熱く語るケースが多いのに驚かされます。「語れる」学生が、「書けない」ことはありえ

ないこと!私は「今、ここで語ったことを出来るだけそのまま文字にしてみよう!」とアドバイスをします。「語り」を文にすると原稿用紙はすぐに埋まっていきます。リアルに書いた文は読み手のハートに届きます。それは書き手の体温が感じられるからだと思います。

自分たちの学びや活動の実態が評価されているのに、それを文章化すればありきたりになってしまう松大生が未だに存在することはなんと残念です。私はそんな学生の支援を続けたいと思います。



この時期に慌てた学生の対応をするのは「SPI数学」「時事問題」「英語」にも共通し、就活時の風物詩になりましたが、センタースタッフ一同、「一歩前進」のサポートに全力を挙げています。

地域連携活動

地域を支える人材を育てることを標榜し、2002年に本学が開学しましたが、当時は大学が地域と連携することに対して評価する声もある一方で、批判や異論も多くありました。しかし「地域の若者を地域で育てて地域に還す」という理念に基づいて積極的に地域と向き合ってきた結果、開学から18年となる現在では地域と連携した大学として一定の評価をいただくようになりました。文部科学省が進めたCOC(地の拠点事業)や2011年の東日本大震災などによる若者の地元志向など大学の地域連携に対する評価は大きく変化しました。

このような状況だからこそこれまでの地域連携に満足することなく、さらなる本学の地域との連携を高めていくことは、今後の大学のあり方を考える上で重要です。地域連携が「市民権」を得た今こそさらなる質の高い地域連携へとステップアップするべく、今後も先進的に取り組んでいきたいと考えています。

本年度より本学では地域連携委員会を設け活動の充実をはかっていることから、最近の地域連携活動の一部をこのコーナーでまとめて紹介していきます。
(地域連携委員長 白戸 洋)

地域防災への取り組み

地域連携における防災からのアプローチ

地域連携委員会の部門のひとつ、地域防災対策委員会の活動の中心は、“長野県地域防災推進協議会”の運営です。本学では地域を対象とした防災士養成研修講座を開始して以来、資格取得後のプログラムを求めご意見・ご要望が数多く寄せられていたことから、県内で活動する防災士のネットワークを構築し、情報交換等を通して防災士の活動を支えるために協議会を設立しました(4月20日設立総会)。この協議会は、本学が運営主体となり、県内自治体と連携しつつ、①各種防災計画等の立案・運用に関して近隣に居住する防災士を紹介・派遣すること、②県内防災士のレベルアップと情報交換

を目的とする定期研修会を実施することを、主な目的としています。

6月21日、22日にはキックオフ研修会として、石巻研修を実施いたしました。災害の学びは被災現場から学ぶことが重要であるとの認識で、最初の研修先には本学が東日本大震災の災害支援活動の拠点にしていた、宮城県石巻市の大街道小学校区を選択しました。当時の人脈を辿って、消防団、学校関係者、医師、地域住民の方々より、主に避難所の運営の現実から学ぶことを研修の共通項として準備しました。40名の参加者からは多くの質問があり、時間が足りないと感じられた二日間でした。今後は協議会の目的に沿って、長野県内の防災士のレベルアップに繋がる研修の提供、またそのことによって、各種防災計画等の立案・運用に関して実際に地域防災推進に役



多数の児童が津波に巻き込まれた石巻市立大川小学校で説明を受ける

に立てる防災士のあり方を追求していく予定です。

もう一つの地域防災対策の取り組みとして、本学の学生向けに正課内授業で防災士の養成を行っています。この度、受講中の学生の一部が“防災教育”の観点で新村保育園の園児に防災の大切さを伝える活動を行いました。学生は、培った知識を保育園児に身体を動かしながら柔らかく伝え、学生らしい臨機応変な対応で大切なことを今回は一つだけ伝えました。この活動を見学されていた新村地区安心安全部会の方々からは高い評価をいただき、今後、同じ地区内の芝沢小学校や高綱中学校へも活動を広げて、災害に強い地区の子どもへの育成に学生の力を貸してほしいとの要望がありました。

このように地域防災対策の取り組みは、本学の強みである地域連携事業と絡み合いつつ確実に展開されています。

(地域防災対策委員長・観光ホスピタリティ学科長 尻無浜 博幸)



設立総会のような様子



新村保育園では防災について園児にわかりやすく説明

地域づくり考房『ゆめ』活動紹介

地域づくり考房『ゆめ』が担っている主な役割は、「学生が地域づくりへ参加する第一歩を踏み出す場」「学部学科を超えた仲間づくりの場」の提供です。

今後は、地域づくりの基盤となる“人”と“人”との関係性を重視し、特に地域の人々と学生をつなぎ合わせることに重きを置いて支援を充実させていきます。

作る楽しさと食べる幸せを感じた子ども料理教室

8月9日、◎いただきます!!プロジェクトのメンバーと夏休み中の新村児童センターの児童1年生から6年生計34名が、本学にて「子ども料理教室」を行いました。◎いただきます!!メンバーは、初めての児童でも作れるように子ども向けのレシピ5品を考案し、当日に臨みました。

三色おにぎり作りでは、普段は炊飯器で炊くごはんしか知らない児童たちが、鍋で炊くごはんに初挑戦です。「やけどしたら大変だから、鍋にあまり近づかないでね」と見



童もメンバーも注意深く調理を進めました。ふっくらした真っ白なご飯が出来上がった瞬間には「わぁ、おいしそう!と、子供たちの顔が緊張から笑顔になっていました。出来上がった料理はどれも美味しそうで、作る楽しさと食べる幸せを感じた料理教室でした。

(地域づくり考房『ゆめ』職員 山岸 勝子)

子ども向けのレシピ5品

- 三色おにぎり ●具だくさんみそ汁
- ハンバーグ ●フルーツポンチ
- 生春巻き

地域健康支援ステーション 活動紹介

地域健康支援ステーションは大学が行う地域貢献活動のうち、より高い専門性を活かした健康づくりを支援する窓口として管理栄養士と健康運動指導士が常駐し、栄養と運動の両面から地域貢献を行っていくことを狙いとしています。

これからも、当ステーションの強みである栄養の専門性と運動の専門性を連携させ、地域住民の健康維持・増進に貢献できるよう努めていくと共に、本学の建物や周辺地域を活かした健康づくり企画を当ステーションから発信して参りたいと思います。

栄養面での活動事例紹介

今年10回目になる松本山雅FCとのコラボレーション企画「スタメシ新商品開発」では、学生18人が17のアイデアを提案しました。出展業者様と打ち合わせを重ね、そのうち5品が商品化に至り8月31日の大分トリニータ戦からアルウィンで販売され、サポーターの皆様にご好評をいただいています。



(管理栄養士 飯澤 裕美)

運動面での活動事例紹介

7月6日、長野県の推進するACE事業と連動して開催された近隣大学の学生を対象としたウォーキングイベントで、本学の学生が浅間温泉街をベースにしたコースの作成と当日の指導を実施しました。当日は、参加した学生間の交流を深めるとともに、大学生の健康づくり対策についての意見交換もしました。8月19日には松本地域大学生フォーラムでパネラーとしてその取り組みの発表をし、若者の具体的な健康づくり対策を提案させていただきました。

(健康運動指導士 土井 麻弓)

市民グループとともに
地域の子どもの支援をはかる

「夏休み しゅくだいきょうしつ・ チャレンジきょうしつ」

8月5日、6日、9日、19日、23日の5日間、「夏休みしゅくだいきょうしつ・チャレンジきょうしつ」を松本市の大庭公民館で行いました。これは市民グループ「寺子屋大庭未来塾」と本学の授業「地域課題研究D」の受講者として、地域の小中学生を対象として開催したものです。「地域課題研究D」は、主に教職を目指す学生や子育て支援に関心のある学生が受講しており、地域での子どもの育ちについてアウトキャンパスを中心とした活動を通して学んでいます。

今回の5日間では各日20名ほどの地域の子どもたちが参加し、大学生と一緒に夏休みの宿題やスライムや水鉄砲などの工作に取り組みました。参加した子どもの多くが夏休みの宿題を終えることができたようです。大学生はそれぞれの子どもが学習に集中できるように、声かけや支援を工夫していました。また、小・中学生が楽しめる夏らしい遊びも考えて準備をしてきたので「楽しかった」「また参加したい」という声を聞いてとても嬉しく感じました。みんなで協力して昼食にカレーやちらし寿司などを作って食べたことも子どもたちにとっては良い思い出になったと思います。ご協力いただいた地域の皆様にご挨拶申し上げます。

(学校教育学科 専任講師 大蔵 真由美)



声かけを工夫しながら学習支援

松本地域の子どもたちにもものづくりの魅力や科学の楽しさ伝える 「2019まつもと広域ものづくりフェア」本学を会場に開催

7月13日、14日の二日間、「まつもと広域ものづくりフェア」が本学を会場に開催されました。通算20回目、本学が会場となって10年目を迎えるこのイベントに、今年は計43種類のメニューが用意され、二日間延べ14,150人の参加者で賑わいました。当日本学から出展した体験コーナーの一部をご紹介します。

砂による創造の世界をダイナミックに遊ぶ

学校教育学科 准教授 澤柿 教淳

今年の企画で設置したのは、「ARすなあそび」という科学体験型の砂箱でした。本機では砂山を作るとその形状に合わせてカラフルな色が付き、手をかざすと仮想的に雨が降り、その水は起伏に



ARすなあそびの装置

沿って流れ出し、低地には池や海が姿を現すという不思議な体験ができます。これには、カリフォルニア大学デービス校の研究グループが開発、提供するAugmented Reality Sandboxを用いています(参照:



カラフルな砂箱で遊ぶ

<https://arsandbox.ucdavis.edu>)。本機には地形を読み取るセンサーが付属しており、砂箱上のプロジェクターが映像をリアルタイムで動的に投影しています。当日参加した低学年児童を中心とした子どもたちは砂場に夢中になり、創造の世界はよりダイナミックに展開され、通常のモノトーンの砂場では考えにくい作品が次々と出来上がっていました。この日のフィードバックを参考に、今後は、地学教育や防災教育の分野での活用を模索したいと考えています。

新たな試みも加えて開催! 「おいでよ」松大健康教室

健康科学研究科・健康栄養学科 教授 廣田 直子

毎年「まつもと広域ものづくりフェア」に併せて、健康栄養学科3年生の授業「栄養教育実習」の集大成として「おいでよ」松大健康教室を



ブースの様子

開催しています。通常の授業はA・Bクラスに分かれていますが、当日は合同で運営に当たります。

今回はこれまでの実施状況を踏まえて、ライフステージを幼児・学童、成人、高齢者の3種類に絞り、ステージとブースという2形式にしました。ブースでは個別の状況に応じた対応が求められ、学生たちにとって、より実践的な学習機会になると考えたからです。

何度もリハーサルを重ねてブラッシュアップを図り、ステージ発表では寸劇やクイズ等を組み入れたものや、ブースでは個別評価やそれに合わせた指導・試食等があり、参加者に楽しんでいただきながら健康や栄養についての関心を高めてもらうプログラムとなりました。

幼児からシニアまで80名の皆様に参加してくださいました。ご参加くださった皆様、関係者の皆様、ありがとうございました。



ステージでのコマ

プログラミングの面白さを 子どもたちに伝える各ブースを出展

松商短期大学部 教授 矢野口 聡

総合経営学部と松商短期大学部矢野口研究室の学生が行っている「キッズプログラミング教室」と「フィジカルコンピューティング体験コーナー」は、恒例の企画として毎年多くの子どもたちに人気です。



キッズプログラミング教室では、就学前から小学校6年生までの子どもたちが90分程度で作成できるゲームプログラミングに挑戦しました。ここでは総合経営学部で教職を目指している学生が講師役を務めていますが、今年はこのブースの他に、子ども向けプログラミング塾のCoderDojo松本と共催で、総合経営学部や教育学部の学生が教えるプログラミング体験ブースも出展し、ウェブカメラを使ったScratch ARや、Web上でプログラミングを学べる「Hour of Code」などを体験してもらいました。また、松商短期大学部矢野口ゼミ主催のフィジカルコンピューティング体験コーナーでは、Scratchでドローンを飛ばすプログラミング体験コーナーを設け、列ができるほど盛況でした。

訪れた子供たちにはこれを機に、将来は地域のものづくり産業を支える人材に育ててほしいと願っています。

コンビニ経営ゲームを実施

総合経営学科 教授 小林 俊一

小林研究室では毎年ものづくりフェアに参加しており、ここ数年は主に小・中学生を対象としたコンビニ経営ゲームのブースを出展しています。

「ザ・コンビニ」というコンビニエンスストアを題材とした経営シミュレーションゲームを用いて、販売する内容や出店場所、店の警備、清掃、サービス、品質のバランス等を工夫して利益を追求し、対戦型で周りの参加者と経営のあり方を競い合います。今年度も評判は上々で、毎年参加している子どもの姿も見られました。

研究室からは4名の学生に協力してもらい、参加者に経営の仕方を教えました。とても楽しみながら参加していた学生達ですが、彼ら自身の勉強にもなる機会をいただくことができました。

スキー部

グラススキーの前田知沙樹さん、世界大会で悲願の8冠達成!!

スキー部の前田知沙樹さん(スポーツ健康学科3年)は、7月末から8月にかけて開催されたFISグラススキー世界選手権(スイス)及び同ジュニア世界選手権(チェコ)で、各4種目(回転、大回転、スーパーコンビ及びスーパー大回転)の全てで優勝し、悲願の8冠を達成しました。「緊張の中でも攻

める滑りができ、しっかり動くことができた」(本人談)。また、同スキー部で知沙樹さんの妹の茉里乃さん(スポーツ健康学科1年)も、世界選手権の2種目で3位に入るなど、両大会で合計5個のメダルを獲得しました。

前田姉妹は冬季種目のアルペンスキーをメインに活動していますが、夏季期間もその強化を目的に、いわば“2刀流”でグラススキーの練習にも励んできました。姉の知沙樹さんはアルペンスキーの日本代表にも選出されており、この冬からはW杯にも参戦し

ます。2022年に迫った北京オリンピックを目指して夏も冬も頑張っておりますので、引き続きご声援をお願いいたします。

(スキー部 部長 齊藤 茂)



前田知沙樹さん(写真左から二人目)、茉里乃さん(三人目)

女子ソフトボール部

内容は互角もインカレ初戦敗退

創部以来13年間守り続けた北信越地区第1代表の座を金沢学院大学に明け渡した今年のインカレは、雨により1日順延した8月31日に、日本文理大学(九州地区第1代表)との初戦を迎えました。試合は両チームとも3回までに好機を一度ずつ作ったもの



の、後続を断つ互角の展開で進んでいきましたが、4回裏に先頭バッターに安打を許し、1死ランナー2塁から適時打を打たれ先制されました。本学も最終回に先頭バッターがヒットで出塁、1死2塁と相手投手を攻めましたが、後続を2者連続三振に打ち取られ、0-1で惜しくも初戦突破はなりませんでした。両チーム合わせて7安打、四死球1、無失策という非常に引き締まった緊張感のある好ゲームで、悔しい敗戦ではあったものの、春先から思うような結果を残せなかった中で、最後に本学らしい粘り強い試合を展開できたことは、新チームへの財産になったのではないかと思います。たくさんのご支援に感謝申し上げます、ご報告といたします。

(女子ソフトボール部 部長 岩間 英明)

男子サッカー部

北信越大学サッカーリーグ1部 前期リーグ戦(試合結果)

順位	大学名	北陸大学	新潟大学	新潟医療福祉大学	金沢学院大学	新潟経営大学	松本大学	福井工業大学	富山大学	新潟大学	勝点
1	北陸大学	-	2△2	2△2	5○2	2○1	6○0	3○2	7○1	17	
2	新潟医療福祉大学	2△2	-	3○1	2●3	3○0	3○0	7○0	8○0	16	
3	金沢学院大学	2△2	1●3	-	3○1	2○1	3○2	3○2	2○0	16	
4	新潟経営大学	2●5	3○2	1●3	-	3●4	3○0	3○0	4○3	12	
5	松本大学	1●2	0●3	1●2	4○3	-	0△0	7○1	4○0	10	
6	福井工業大学	0●6	0●3	2●3	0●3	0△0	-	2○1	4○1	7	
7	富山大学	2●3	0●7	2●3	0●3	1●7	1●2	-	3○2	3	
8	新潟大学	1●7	0●8	0●2	3●4	0●4	1●4	2●3	-	0	

北信越大学サッカーリーグ1部 後期リーグ戦(日程)

節	月	日	曜	対戦カード	開始時間	会場
第1節	9	13	金	金沢学院大学 - 松本大学	10:30	金沢スポーツ交流広場
第2節	9	22	日	松本大学 - 新潟経営大学	10:15	松本大学
第3節	9	29	日	松本大学 - 新潟大学	10:15	松本大学
第4節	10	5	土	富山大学 - 松本大学	11:00	若鷲スポーツ公園
第5節	10	12	土	新潟医療福祉大学 - 松本大学	10:00	鳥屋野球場
第6節	10	27	日	松本大学 - 福井工業大学	10:15	松本大学
第7節	11	4	月祝	北陸大学 - 松本大学	10:00	聖蹟スポーツセンター

※日程・会場が変更になる場合があります。

ラート競技部

新星☆ 松本大学ラート競技部 第15回全日本学生選手権大会で輝く

第15回全日本学生ラート競技選手権大会が8月17日、18日、新潟大学において開催されました。本学ラート競技部は大会3連覇をねらう及川輝(スポーツ健康学科4年)が怪我で欠場する中、南雲彩香(同3年)と7名の1年生部員が奮闘し、松本大学ラート競技部健在ぶりを示す大会となりました。

新入部員7名はラートに触ることも初めてという4月の入部以来、インカレ出場資格を得るため技の難度に挑戦し研鑽を続けてきました。今大会でも会場の雰囲気

にのまれることなく、南雲を含む4名が種目別で8位入賞し決勝(自由演技)大会へと進み、新星松本大学ラート競技部をアピールする成績を収めることができました。

(ラート競技部 顧問 犬飼 己紀子)



【競技成績】

男子個人総合

7位 山口航平(スポーツ健康学科1年)

新人賞(男子)

2位 山口航平

3位 丸山庸介(スポーツ健康学科1年)

新人賞(女子)

2位 今井有香(スポーツ健康学科1年)

3位 今井美月希(スポーツ健康学科1年)

デモンストレーション演技

3位 松本大学

硬式野球部

関甲新学生野球連盟

秋季2部リーグ戦(日程)

節	月	日	曜	対戦カード	開始時間	会場
第2節	9	14	土	松本大学 - 埼玉大学	10:00	松本大学
		15	日	埼玉大学 - 松本大学	12:30	
第3節	9	21	土	松本大学 - 常磐大学	12:00	松本大学
		22	日	常磐大学 - 松本大学	12:00	
第4節	9	28	土	松本大学 - 新潟大学	12:00	松本大学
		29	日	新潟大学 - 松本大学	12:00	
第6節	10	12	土	松本大学 - 宇都宮大学	10:00	松本大学
		13	日	宇都宮大学 - 松本大学	12:30	
第7節	10	19	土	関東学園大学 - 松本大学	10:00	平成国際大学
		20	日	松本大学 - 関東学園大学	12:30	

※日程・球場が変更になる場合があります。

研究室で開発した商品がG20晩さん会のメニューに採用

健康栄養学科矢内研究室では、松本市で鹿肉の製造販売を行う山崎商店と協働で、鹿肉の商品化に取り組んでいます。鹿は野生なので、肉の特性の他に寄生虫やウイルスの問題があり調理加工は難しいものですが、鹿肉には高タンパク、低脂肪、高ビタミン・ミネラル含有という特長もあります。このような特長を活かし、解体所の場所決めから衛生面の監修も含めて山崎商店と



一緒に開発に取り組んだ商品が、6月に軽井沢

プリンスホテルで開催されたG20「持続可能な成長のためのエネルギー転換と地球環境に関する関係閣僚会合」の晩さん会のメニューに採用されました。これは当研究室での「安曇野林檎ナポリタン」の開発の際に、安曇野市ご当地グルメ開発のアドバイザーとして縁のあった軽井沢プリンスホテルの総料理長に採択いただいたもので、今回の開発は、本学の地域貢献活動の実績や健康栄養学科の食の学びによって可能となった実例といえます。

商品の詳細は、後日記者会見を行いますのでご確認ください。

(健康栄養学科 准教授 矢内 和博)

第9回「平和・国際交流に関わる留学生日本語スピーチコンテスト」で快挙！ 本学の留学生が1、2、3位独占、特別賞も2名受賞！

7月13日、9回目を迎えた「平和・国際交流に関わる留学生日本語スピーチコンテスト」において、本学の留学生が1、2、3位を独占し、



更に特別賞も2名が受賞しました。このコンテストは文字通り、平和と国際交流をテーマにしています。そのため、日頃から国際交流や平和について考えたり経験したりしていないと、スピーチはできません。16名のスピーカーが近隣の大学や専門学校から原稿審査によって選ばれ、松本市の中央公民館で行われる本

番のスピーチコンテストに臨みます。本学からは8名応募しましたが、驚いたことに8名全員の原稿がパスし、スピーチコンテストに出場することになりました。出場が決まったときから、何度も練習して、それぞれの思いをぶつけ、タイトルのような快挙につながりました。

(松商短期大学部 准教授 中村 純子)

松本大学図書館公開講座 ～モーリス・センダックを通して「創る」ことへの思いをみる～

7月27日、「生きる力を育てる絵本子どもが絵本と出会うとき～モーリス・センダックが遺したもの～」と題して、図書館公開講座を開催しました。

講師は、工学院大学附属中学・高等学校で司書教諭を務める有山裕美子先生。有山先生は、絵本「かいじゅうたちのいるところ」などでおなじみの、絵本作家モーリス・センダックの研究者としても著名な方で、センダックの生涯とその作品に焦点をあてた話で、創作活動の奥深さについて考える機会を提供していただきました。

作品は読んだことがあっても、作者の社会や人への思い、人生観、苦悩や

(松本大学 図書館長・松商短期大学部 教授 伊東 直登)



愛情などについて直接知る機会はありません。ましてやセンダックのように、すでにこの世にいない作家では願いようもありません。それが、研究者を通して生前の言葉や行動から作品の背景や行間を読み解くことにより、新しい世界がよみがえってきます。当日は東京や神奈川からも参加者が集まり、一緒に作者や作品と向かい合う楽しさを再認識したひとときでした。

栄小学校児童の健康意識増進に向けた取り組みについて



3.11東日本大震災の翌日に地震のあった、下水内郡栄村の小学校児童の体力向上への取り組みを2年前から行っています。山間部の、全校児童が50人足らずの小規模校でバス通学、友達の家に歩いて遊びに行くには遠すぎる、冬は雪に埋もれるという環境の中で、子ども達の体力低下が課題となっています。そこで小学校と協働し、児童がやらされるのではなく「自分で継続できる運動メニューを考え、実

践する」という取り組みを始めました。5～6月には6週間、実際の活動量を測定した個々の結果と自分の体力測定の結果について、子ども達が分析し、運動メニューを考えました。そのことで「知」と「体」の両方が育つことを目標としています。活動量は予想外に低く、個々の体力の課題も異なり、克服するためのメニューを考えることは、子ども達には大変だったと思います。学生は活動量を増やすための指導案を作成し、体育の授業の中で実践しました。学生達の学びの場も提供していただいたことに感謝いたします。(スポーツ健康学科 専任講師 中島 節子)

第7回「デパートゆにつと」本学学生と高校生が趣向を凝らす

長野県商業教育研究会と本学が共催する第7回「全国高校生合同販売デパートゆにつと」が8月16日から3日間の日程で開催されました。会場の井上百貨店本店7階催事場では、県内8校・県外2校の高校生が地域の資源を活かした特産物を販売し、多くのお客様で賑わいました。本学の学生もイトインコーナーを運営して販売をサポートするととも



に、山賊焼きのプロモーション活動を行いました。この取り組みも7年目を迎えましたが、参加した高校生は販売の量よりも質を重視するようになり、会場に来るお客様に満足してもらうために、商品の説明を丁寧に行いながら質の高い販売マナーを心がけていました。またジビエ関連の食品やクラフト雑貨など、高校生が地域の方々と交流する中で発見した特産物も扱われるようになりました。販売会が恒例となる中で、高校生や大学生の活動を見るために毎年お越しになるお客様も増え、松本の夏のイベントとして定着しつつあります。

(観光ホスピタリティ学科 教授 大野 整)

三大学SD情報交換会



2015年から清泉女学院大学と佐久大学及び本学との間で、SD情報交換会を開催しています。これは、各大学の理念及び特色等を踏まえつつ、事務職員の能力及び資質向上を図るとともに、教育資源の相互活用や学生サービス等の向上を目指すことを目的としたもので、7月31日、清泉女学院大学で開催されました。「教学マネジメント体制等に

ついて」をテーマに、各大学の教育の内部質保証体制の構築として行われている、教学マネジメント体制、IR(Institutional Research)活動、教員評価制度、アクティブラーニングの実施体制の取り組みなどについて報告がなされ、互いの課題について活発な情報交換を行いました。

(管理課長 赤羽 雄次)



地域の景観をつくる学び「ひまわり畑」

今年も試験明けと猛暑という2つの壁を乗り越え、8名の学生たちが企画や広報を担い、11回目のイベント「ひまわりフェスティバル」が開催されました。これもJA新村青年部、新村保育園、アルピコ交通をはじめとした多くの関係者の皆さまのお蔭であり、感謝申し上げます。トラブルもありました。長引く梅雨の影響で開花が2～3日遅れ、さらにイベント開催終了直後の1時間のゲリラ豪雨により、満開を迎えたひまわりが半数も倒れてしまいました。タイムリーなお知

らせが十分にできず、遠くから訪れたのに残念な景色だった、という方もおられるかもしれません。

観光スポットの一つとして、全国各地でお花畑という景観をつくる動きがあります。本学では教育活動の位置づけが加わり、楽しみにしている方々と共に地域の景観をつくる、という地域活性化の実践でもあります。引き続き、地域で学ぶ場の一つとして活動を継続していきたいです。

(観光ホスピタリティ学科 准教授 中澤明代)



大学の畑で初の収穫！障がい者雇用推進への取り組み

本学では職場環境整備の一環として、障がい者の雇用推進にも取り組んでいます。具体的には総務課所属農園担当として雇用し、支援員を含めた3人のメンバーでひまわり畑の南側の一角での野菜作りと8号館清掃作業を主に担当し、さらに地域貢献の一環としてものぐさ公園の草取り等を行っています。

畑では昨年秋から順次植え付けや種まきを行い、7月からは本格的に収穫が始まりました。収穫した野菜は格安で販売しています。当初は知名度がなく心配しましたが、今では校内4か所で販売しており、多くの教職員や学生に購入してもらえるようになりました。

今の目標は無農薬の朝採りの旬野菜を提供する事ですが、今後は有機野菜作りを目指して活動して行きたいと思っています。10月の大学祭でも野菜の販売を行う予定です。皆様のご利用をお待ちしております。

(総務課 専門員 相良 光男)



教職員の健康増進サポート - 明日からもうひとがんばりするために -

改正健康増進法が7月1日に一部施行されたことを巡り、本学の敷地内も同日から全面禁煙になりました。「体に悪いことはわかっています」「いつでもやめられるから大丈夫」、喫煙者の方からよく聞く言葉です。本学の喫煙者の方々にも、禁煙外来のことや薬局で買える治療薬のことをご紹介したりもしましたが、病院に行くことやお薬を買いに行くことが面倒で、つい先延ばしになってしまうようでした。そこで、「タバコをやめたいな」という気持ちが少しでもある方に、6月からパッチ型の禁煙治療薬を使用したサポートを実施しました。喫煙歴30年という猛者もいましたが、9人

の挑戦者のうち、7人が禁煙を継続しています。同じ部署の3人が一緒に禁煙をスタートして、お互いに励まし合いながら8週間の禁煙プログラムを終了した方々もいらっしゃいました。

あのと禁煙しなければよかった、と思うことはまずありません。皆さんが健康で充実した毎日を送れるように、今後もサポートしていきたいと思っています。

(健康安全センター 保健師 脇本 澄子)



プログラム中は定期的に面談を行います

速報

健康栄養学科生が今年も長野県管理栄養士に採用されました

昨年に引き続き、今年も健康栄養学科生が長野県管理栄養士として採用されました。

その他の公務員試験と教員採用試験についても順調に進んでおり、結果がまとまり次第、本誌紙面にてご報告いたします。

教育界に新しい風を「2019年度松本大学教育実践改善賞」論文募集

本学では昨年度、松商学園創立120周年にあたり地域貢献を理念とした「松本大学教育実践改善賞」を創設しました。大学が一般教員を対象とした教育実践賞を創設したことは全国的にも例が少なく、県内では初の事業となります。昨年度は20名の応募があり、4名が松本大学教育実践改善賞に、7名が特別賞に輝きました。受賞論文は冊子にまとめてありますので、希望者は、下記連絡先までお申し出ください。本賞は、今年度から、長野県教育委員会の後援を受けて実施しています。皆様から多数のご応募をお待ちいたします。

目的 学校教育における教育実践または地域の教育振興に実績が顕著な教員を表彰し、長野県全体の教育振興に寄与することを目的とする。

応募条件

- 1 一般教員部門** (若干名) 長野県内の小学校、義務教育学校、中学校、中等教育学校、高等学校、特別支援学校の現職教員を対象。
- 2 卒業生部門** (若干名) 松本大学の学部または大学院(研究生を含む)を卒業または修了し、現在教職に就いている者を対象。長野県の内外は問わない。

※他の賞または研究誌に応募し、受賞または掲載されたものは除きます。 ※応募者が自ら行った実践であることを条件とします。

賞

賞状および賞金8万円

募集期間

2019年10月10日～12月10日(郵送のみ、必着)

応募方法

取り組んだ教育実践の内容を指定の書式の論文にまとめ、応募票(松本大学HPからダウンロードし必要事項を記入)を添付し、募集期間内に下記のとおり先へ郵送。

〒390-1295 長野県松本市新村2095-1 松本大学教職センター

〈教職センター長〉 E-mail yasutoshi.yamazaki@t.matsui.ac.jp
〈教職センター事務室〉 TEL 0263-48-7260

お問い合わせ先

▶詳しくは、こちらをご覧ください。

松本大学教育実践改善賞 2019

検索



一生に一度のイベント!

松商短期大学部 教授 川島 均

蒼穹のリレーコラム、書く順番が回って来てしまいました。実は学生新聞のPage1に自分の趣味のラグビーのことを書いたことがあって、もう書くネタがないと考えていました。その記録を見ると4年前イングランドで開催されたラグビーワールドカップ直後のことで、しかも今回も日本開催ワールドカップ直前!!何かの巡り合わせでしょうか。一生に一度と思われるこのコラムで、ラグビーについて書くことをお許しください。大学生以降に降していなかったラグビーを再開し

たのは2012年のことでした。学生時代は標準的体重でしたが、その頃に欲しかった体重はいつの間にか要らないほどに増えていました。体重は相手への衝撃となるので武器にもなりますが、自分への衝撃にもなってしまふことを実感しています。ヘタで実はルールもしっかり理解できていないし、走るのもしんどいし、大きい相手にタックルするのも怖いし…でもなぜかものすごく面白いのです。

松本地域にはラグビー部のある高校はほとんどないので、チームのメンバーは県内他地区や県外出身者が多く、最近では国外出身者とも一緒に

やっています。教員、農家、会社員、経営者など、いろんな人がいて本当に楽しい。よそのチームも敵という感じではなく、一緒に練習したり、15人に足りない時にはお互いメンバーを貸し借りしたり。ノーサイドという言葉がありますが、社会人になってようやくその言葉をかみしめています。こういうところもまた楽しい。

9月20日から日本開催のワールドカップが始まります。「4年に一度ではない。一生に一度だ。」というキャッチコピーにやられて高価なチケットを買い、日本戦を一試合だけ見に行く予定にしています。テレビでラグビーを見かける機会もあるでしょうから、多くの人が面白いと感じてくれると嬉しいです。

Information

第53回松本大学大学祭 『梓乃森祭』



梓乃森祭特設HP



【一般公開】10/12(土) 10/13(日)
10:00~16:00

【テーマ】A variety of colors
~新たな1ページ~

■MUSIC LIVE 2019「家入レオ」

10月12日(土) OPEN 16:00 START 17:00 / 第一体育館

■お笑いライブ in 野外ステージ [出演]平野ノラ、パッドナイス常田

10月13日(日) 12:00~ / 野外ステージ

■第10回 松本大学 地域貢献大賞選考会 10月13日(日) 13:00~ / 512教室

■ワンちゃん・ネコちゃん家族探し隊 10月12・13日両日開催
ワンちゃんの見学 13:00~15:00、ネコちゃんの見学 13:00~14:00 / 2号館中庭
パネル展・物販・バルーンアート / 126教室

■ファッションショー [テーマ]Happiness ~世界の芸術と文化~

10月13日(日) 10:30~11:30 / 第一体育館

※その他各種イベント、模擬店など多彩な催しで皆様のお越しをお待ちしています。詳しくはHPでご確認ください。

松本大学教育学部特別企画

映画上映会「みんなの学校」

梓乃森祭
同時開催

【日時】10/12(土) 1部 / 10:30~12:20 2部 / 13:30~15:20

【会場】松本大学232教室

大阪の公立小学校での「不登校ゼロ」を目指した教育実践が目撃され、その様子を記録にとどめたのが今回上演するこの映画です。ここで実践されている教育をぜひ本学の学生に紹介したいという思いで上映する運びとなりました。ご来場いただき、学生たちとともに今学校教育が抱える課題について改めて問い直していただけたらと思います。

(学校教育学科 教授 羽田 行男)

●問い合わせ先

教育学部教職センター TEL 0263-48-7200(代表)



2019最後のオープンキャンパス

高校生はもちろん、保護者や教員の方もぜひご参加ください。

【途中参加・途中退出可】

●松本大学・松商短大

【日時】9/28(土) 10:30~15:30(受付10:00~)

【内容】松本大学・松商短大概要説明、学科説明、ミニ講義、トレーニングルーム見学、ランチ無料体験、キャンパス見学ツアー、個別相談 etc.

無料シャトルバス運行

長野県内<松本駅、長野駅、上田駅、佐久平駅、岡谷駅、下諏訪駅、茅野駅、伊那(上伊那農業高校前)、飯田駅>・山梨県<甲府駅、小淵沢駅>、新潟県<新潟駅、高田駅>からシャトルバス運行 ※松本駅以外要予約

受験前の疑問を解決 入試相談会 個別相談

【日時】10/12(土) 11/29(金) 11/30(土) 10:00~15:00

【開催場所】松本大学

※送迎バスは運行しませんので、ご注意ください。

予約不要

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問い合わせください。

www.matsumoto-u.ac.jp ☎0120-507-200

新刊情報

「あずさの森のピタゴラス」 教育学部の教員の思いと研究

松本大学教育学部の学生への指導は、教えられる教科だけでなく興味と好奇心を持って自ら学ぶことをモットーにしています。そんな教育学部にいる教員が、どんなことを思い、考え、研究しているのかを知っていただくための一冊。

松本大学教育学部
著者・編集/A5版/270ページ



編集後記

関東地方では、台風15号による大きな被害を受け、住民の生活に大きな影響を及ぼしました。近年、毎年のように自然災害があり、広域的・局地的だけでなく、個人的レベルでも防災について意識しなければならぬ状況です。本学では、学生・社会人向けに防災士養成を行っています。最初は小さな取り組みでしたが、だんだんと大きくなり、県と協議会を持つにまで発展したものです。研究においても、個人レベルでしかなかったものが、国内外との共同研究へと発展し大きな成果を得ることがあります。いずれも真摯に継続するの重要性を感じます。

(記・入試広報委員長 山田 一哉)